茨城新聞 2021.5.28

「赤水図」教科書に初掲載 (上)

寄稿

佐川　春久

偉大な業績認知を

現在の高萩市に生まれ、江戸時代に日本地図を製作した長久保赤水（せきすい）（1717～1801年）の業績が認められ、赤水の「赤水図」（改正日本輿地（よち）路程全図）が本年度、初めて中学校の地図帳に掲載された。

早速、新学期を迎えた高萩市立松岡中学校では、4月15日に社会科の授業で初めて「赤水図」について学んだ。生徒たちは「地元の長久保赤水が地図を作ったことは、すごい！　誇りに思う！　うれしい！」と話し、郷土の偉人に思いをはせた。伊能忠敬も測量時には、「赤水図」を常に持ち歩いていたことが分かっている。「赤水図」は現代に見られるコンパクトな折り畳み地図の先駆けでもあり、その実用性から伊能忠敬や吉田松陰が旅に携行し、この携帯性も広く庶民に愛用されたゆえんである。今回の教科書への掲載を機に大勢の国民の皆さま方にも、ぜひ「赤水図」と長久保赤水の偉大な業績を知ってほしいと思う。

「行基図」や「石川流宣図」「赤水図」などがあって「伊能図」がある。つまり「伊能図」は一晩でできたわけではなく、それぞれの先達の業績の上に成り立っていることを知っていただきたい。「日本地図」製作の変遷の上で歴史地理学上の長久保赤水の業績の位置付けと、その立ち位置をしっかりと確立していただきたいと切望している。

高萩市では、昨年12月に重要文化財指定を記念し、「赤水図」第2版の原寸大レプリカを3000部作成した。現在、1部千円で販売している。この地図は、赤水が75歳の時、地図製作の集大成として完成させた日本地図である。初版（安永版）と大きく異なる点は、海路が描かれている点、地名情報（郡分図、汐路に関する記述）が非常に豊富になっている点などが挙げられる。

赤水は初版と第2版について何度も考証・改訂を重ねており、地図の正確性を追求する赤水の熱意を感じることができる。ちなみに、初版が13刷り、第2版が4刷り確認されている。今回の原寸大レプリカは、第2版の1刷りに当たり、長久保家に代々伝わってきた着彩色試作品として国の重要文化財に指定された貴重な日本地図である。

（長久保赤水顕彰会会長）